

平成22年度第3回高知県教育振興基本計画推進会議の議事概要

- 1 日 時 平成22年10月18日(月) 13:30～16:30
- 2 場 所 高知県教育センター分館 1階 大講義室
- 3 出席者 ○委 員：松永委員、岩塚委員、時久委員、森委員、村岡委員
○県教育委員会等：東教育次長、教育委員会事務局各課長、教育センター所長、教育事務所長、心の教育センター所長、私学・大学支援課長(以上代理含む。)、その他教育委員会事務局職員

4 概 要

・議題(1)「教育の日」の制定について

<事務局から資料1の説明を行う。>

<意見交換>

(議長)

議論の進め方だが、資料1の1ページ目、趣旨、名称、日程、制定の方法、具体的な取り組みの推進体制等、全体の枠組みについて、まず最初に議論して、それが確定した段階で、宣言の案について議論できたらと思う。

3、4ヶ月間議論してきて、「〇〇の日の制定は無駄なのでやめた方がいい」という意見も県民の一部にはあり、我々の内部でも、一過性のものにしないための方法は何かあるのか、危惧がずっと消えずにここまできていることは事実だと思う。その上で、今日、決着をつけなければいけないので、まず、やらないという選択はあるのか。あるいは、今日、決めるのは少し早いのではないかという意見がもし多数であれば、その後の議論はやめるので、中身に入る前に、まずその確認をしたいと思うが、いかがだろうか。

事務局が第2回と第3回の間に関連会議を設定したのも、おそらく、その辺りを踏んで本当に制定するのかということについて、委員の皆様のご意見を伺いたかったということもあると思うので、改めて確認をしたいと思う。

(委員)

反対はしない。

(議長)

今、反対はしないという意見が出たが、もう少し積極的にできないかと思う。私も、これまでの議論を聞いていて、教育の日を制定することに、「そんなものはけしからんからやめてしまえ」という意見はごく少数だと思う。ただ、本当に前向きにこのような場を利用して、高知県の教育風土づくり、文化創造というものを一層推進することができるかどうかについて、皆十分な確信を持ち得ていないことも事実だと思う。「はい、進めてみましょう」となるのかどうかということも一つのキーポイントだと思うが、その辺はどうか。

(委員)

今の社会の流れ方というのは、あまりにも場当たりのようになって、事象に対し、それを追いかける、あるいは、対応するというパターンでずっと落ち込んでいる。学校現場も同様で、加えて学力の問題や就職の問題などで、これもまたずっと後ろを叩かれているような状態で、ただやみくもに走っているみたいなことが、しばしば生じている。また、教育委員会の方も、どうしてもいろいろなことに追われることが続いていて、事象が起きたことに対して、どう対応するかが主になっているような気がする。

こうしたことを考えると、「教育の日」を制定することで、何かがすぐ変わるというものではないが、教育に対する意識、危機感は皆持っているので、県の方で上手くリードしていただいて、1年に1回でもムードを盛り上げることができれば、その意味は大きいのではないかと思う。

(委員)

教育を考えた時に、例えば、県教委は県教委、地教委は地教委、現場は現場という風にばらばらの形でやっていく中で、連動性がないことが、一番大きな課題ではないかと思う。そういう部分で、この「教育の日」が一つのきっかけとなり、パイプをしっかりとつなぎ直すことができた時に、初めて皆が関わる姿勢ができると思うので、「教育の日」を一つの契機と捉えていくことができると、非常に良いと考えている。

(委員)

今、なぜ「教育の日」かということになるが、制定する以上は、それなりの理由がないといけないと思う。理由の一つは、高知県の学力が非常に低いことが明確になっていて、それに対する意識。もう一つは、これは社会的なことでもあると思うが、戦後の教育が物の豊かさというものをずっと追求してきたが、ここに来て、あまり国民が幸せでないこと。そういう現状の中で、「じゃあこれからの教育をどう変えていくか」という観点で、高知の教育を見直す視点に立てば、私はそれなりの

意味があると思う。

(委員)

私は、この「教育の日」には大きな意味があると思っている。全国の様子や高知県が取り組んでいることなど、そうした柱の部分について、県民全体でそこへ立ち戻る、その視点に立つことがとても大事だと思う。例えば、学校現場を見ても、保護者は子育てにも迷っているし、いろいろなことでも迷いながら、その心配事を学校にぶつけてくるので、ばらばらな状態で様々な事例が学校やその他の場所で交わされているということがよくある。だから、対症的に直面している問題への対応で四苦八苦しており、もっと大きな流れで教育を見る必要があるのではとも思っている。

そういう意味では、新聞報道などで教育の今の状況や課題、方向などを一緒に考えましようとして投げかけたりすることなど、振り返りの機会を設定したり目標を定めたりすることは、とても大事だと思う。

(副議長)

やっと今、高知県が人づくりということを真剣に考える機が熟してきたと思う。「教育では、飯が食えねえよ」というのが高知県の実態としてあった。それどころか、経済的な部分で「金は稼がないかん、教育どころじゃない」という声が、たくさんあったと思う。しかし、今やっと「人づくりというものは、どうあるべきなのか」、「人づくりこそ地域づくりではないか」ということをきちんと議論する風土ができてきた。そして、私たちもよく議論をしてきたことだと思うが、高知県の教育風土をどんな風を高めていくかが、私は最も大事なことだと思っている。

高知県では、教育というものが、特定の専門家に任されてきたきらいがあって、その弊害がものすごくあったのではないかなと思う。「そうじゃないだろう、一人ひとりが、全体が、もっと教育というものを考えていいのではないかと、今やっと機が熟してきたと思う。だから、専門家だけではなくて、県民の一人ひとりが教育、人づくりを考えることができるきっかけづくりをしなければならないと思っている。教育の日の制定をすることによって、それを意識化、意義付けさせていく積極的な取組こそ、これからの高知県に必要なことだと思っている。そういう意味では、この「教育の日」の制定にはかくかくしかじかという、きちんとした意味づけや意義付けが必要だろうと思う。

したがって、なぜ「教育の日」を制定をし、何を意味づけるのかということが、今、本県に求められている課題だと思う。これを制定したからといって何ができるのかという、後ろ向きな考えではなく、制定することによって高知県の教育の何を変えようとしていくのかこそ、私たちがこれから考えていくことだと思っているの

で、その点は皆の意見と非常によく似ていると思う。

(議長)

今、委員の皆様から出たようなことが、これから制定しようとしている「教育の日」で実現できれば、本当に意義のあるものになると思う。そういう意味で事務局には、今出された意見のエキスを趣旨にきちんと位置付けて文章にすることを願います。このことが、取組に携わる人々の意識や、もっと広がって県民の中に浸透していけば、まず間違いなく単なる地域のイベントに終わらずに、高知県の教育全体を底上げするような、一つの大きな軸になり得るものだと思う。

それでは、推進会議としては、昨年の教育振興基本計画の中で、「教育の日」の制定が望ましいということを書いたこともあり、その後も検討を重ねてきたが、「教育の日を制定する」ことで、確認をいただいたものとする。その上で、名称、日程、制定に向けてどんな形で進めるのか等々について、議論をしていただきたいと思う。名称についてはずっと「教育の日」と呼んできたし、全国的にも「教育の日」が多い。それでも良いが、9月17日の連絡会での議論では、所々で「学びの日」という名称も出てきた。

実は、今度の全国生涯学習フォーラム大会だが、昔は長いこと「生涯教育」と言ってきた。ある時期から「生涯教育」ではなくて、自ら学ぶという点で、「学習」という言葉に行政も変えた。振興基本計画を改めて読み直しても、我々の検討した基本理念にも、「自ら学ぶ」という文化、風土というものを大事にしたい文章もあるので、「学びの日」の方がむしろふさわしいのではないかとも思う。

もう一つは、「志」という言葉が出てきて「これもなかなかいい言葉だな」と。高知らしい言葉かなと思う。高知県は荒唐無稽なところもあるかもしれないが、志が非常に高い県民性を持っているように思われる。また、象徴的な龍馬の存在もある。そうした点では、県民の皆様にも自分たちの土佐という国を表す言葉として、「志の国」というのは割合ぴったりくるのではないだろうか。それを実現するために、どんな教育文化風土をつくる必要があるのかというメッセージにもなっているのではないかと思う。私はその1の「志の国・高知学びの日」が良いのではとないかと思っている。名称については、最終的に我々だけで決めるわけにいかないが、「我々としてはこんな風に考えています」という提案としてまとめたいと思うので、意見を伺いたい。

(委員)

17日の連絡会で「志の国」が出てきた理由は何か。

(委員)

17日の会では、来年から「龍馬であい博」の次にくるものとして、「志の国・志国」というフレーズが挙げられた。

(事務局)

観光の方に聞くと、四国四県の「四国」と「志の国」という、二つに掛けているそうである。「志国」というのは、高知県が四国に位置することを分かってもらうために、「四国」に掛けているのと、「志の国の高知」という意味で「志国高知龍馬」ということである。

(議長)

であい博は全国向けの発信でもあるが、「学びの日」、「教育の日」は県民に向けてのものなので、高知が四国にあるとか、「四国四県と協力せないかん」という事はあまり考えなくても良いので、高知のことだけを考えた方が良いと思うが。

(委員)

「志の国高知学びの日」。最終的にはこれかなと思う一方で、長いので「高知学びの日」の方が皆が覚えやすいかなとも思ったりして迷うが、でも「志」というこの言葉に、高知の県民性や前向きな気持ちを凄く感じるので入れたいと思う。

(委員)

「教育の日」ではなく、「学びの日」という言葉の採用は非常にありがたい。どうしても教育ということになると、教育する、教育を受けるという、どちらかというと、他動詞の世界のような感じを受ける。「学ぶ」というもっと本質的なものの方を大事にしたい。このことは、何度もこの会でも申し上げてきたが、例えば高校生にずっと学習を続けさせようとした時に、何を動機にして続けさせるか。これは大学でも同じだと思うが、どちらかというと、むしろ背中をずっと押しっぱなしにしていないと、なかなか動かない状況であり、それは結局、動機がないからだと思う。ある程度の段階で、ひとりでの動き出して、放つといっても…といふところへ本当はいつてもらいたいの、やはり押しあげないといけないとか、引っ張ってあげないといけないとか。そういうことが、しばしば見られるような気がする。

そういう意味では、五感が発達する時期から、そうしたモチベーションを高めていくことが大事になってくると思うので、「教育」よりは「学ぶ」という言葉の方が良い気がする。

(委員)

私も「学びの日」がいいと思う。「志」については、私は入れない方がいい。理由は、「志」は学ぶものではないように思われるから。他にももっとたくさんの学ぶべきものがある。

(委員)

ひらがなか漢字か、表記の仕方も考える必要がある。

(議長)

この「志の国」は、「高知」に掛かっているのだろう。その「志の国」で「学ぶ」と考えているのかなど。だから、「志を学ぶ」という意味ではないのかなと思う。少し長いので、文言としては「志の国」と書いて、日常的には「高知学びの日」とか、「高知学び週間」としたらどうか。イメージを残して表現上は「高知学びの日」という形にすると、表現として悪くないと思う。

(委員)

一つのキャッチフレーズとして名称を考えることも大切である。例えばニュースでパッと聞こえてくるときに、「志国高知学びの日」と「高知学びの日」では、語呂として「志国高知学びの日」の方が凄くリズム感がある。ただ、無理なこじつけが入り過ぎではと感じる部分も少しあり、どちらを採用するか非常に悩むところである。

(議長)

教育問題というのは立場によっていろいろな議論ができるもので、教育の中に何を含めるか、どういうことが教育で大事なのかといった点は、いつも意見が分かれる。しかし、志ある人間が高知、あるいは日本に必要であるという点では、それほど異論がないと思う。志の中身についてはいろいろと議論があるかもしれないが、個々の事象に対する対応という面ではなく、もっと広い部分で、教育というものは、「志ある人間がすくすくと育っていくことを応援するものだ」というイメージを持たせる点で、「志」という言葉は良い言葉だと思う。県民に対してもメッセージを発信できるのではないかと。「じゃあ、志って何だ」という議論があっても、それはそれでいいのではないかと。

最近、「教育問題はマイナスの意見ばかり出てくるので悲しい」という意見も聞くので、前に向かって進むという点で、このようなキャッチフレーズは悪くないと思った。

(委員)

少し名称が長い。「高知」という言葉は入った方がいいか。地域の言葉はどこの県でも入っているのか。

(議長)

全国的にその限りではないと思う。制定の方法はいろいろとあるが、宣言するということで県名は入れている。

(委員)

他県の例を見ると、大体県名が入っているが、入ってない所も2カ所ぐらいある。埼玉は「彩の国教育の日」、和歌山は「紀の国教育の日」という形で県名を省いて、県のキャッチフレーズのようなものを代わりに入れているというイメージがある。

(委員)

高知と言えば「土佐の国」。

(委員)

「志の国」と言えば、「土佐」と言いたい。

(委員)

私も最初は、「高知」という表記についても最近ではひらがな表記が多いので、漢字の表記には疑問符を付けた。しかし、「志の国」というのが前にあるので、更に漢字2字が入ってくると少ししつこい感じがする。

(委員)

「高知学びの日」にしたとしても、趣旨や宣言文が裏にあるわけで、それをひとまとめにして「志の国」と捉えたとすれば良いのではないか。便宜的には「高知学びの日」になるとしても、「志の国」を付けて良いのではないかと思う。

(議長)

1年続けて、来年変えますというわけにいかない。最低10年、20年は変えないと思う。

(委員)

ここで決定したことが最終決定なのか。

(議長)

ここは決定機関ではない。少なくともこの推進会議としてどうするかということ。

(事務局)

資料 1 のタイトルで、提言という形にしている。推進会議からの提言を頂き、関係機関は教育委員会に持っていく形になると思うが、提言の段階で一つに絞っていただくと、意味合いが付くと思う。

(議長)

推進会議としては、やや強引だが時間の制限があるので、「志の国 土佐 学びの日」ということで提言をさせていただく。ここは決定機関ではないので、今後、全国生涯学習フォーラム高知大会までの間に、いろいろな段取りが必要になってくると思うが、その過程で少し変わったとしても問題はないので、我々としては、これでまとめさせていただくということによろしいか。

それでは、「志の国土佐 学びの日」ということにする。日程は 11 月 1 日。それから「学びの週間」としては、1 日から 7 日までということだが、その点についてはどうか。

(委員)

例えば学校のスケジュールでは、11 月 1 日から 1 週間の期間に何も入っていないこともある。もちろん 11 月にはいろいろな行事があるので、この内容に合致することはいくらかでもメニューとしてあるが、11 月 1 日からの 1 週間ということになると、その学校のスケジュールによっては、その期間に入らないところもたくさん出てくると思う。ここに 1 週間という限定を設ける必要があるのかどうか。1 週間というより、私は 1 カ月ぐらいの期間の方が、学校としては今の取組をさらに発展させる形で盛り上げることができると思う。

それから、教育委員会のサイド、県のサイドとしては学校現場が活性化するように、今後、これを盛り上げる支援をしてくれると思うが、1 週間ということになると、何かを実施するにしても苦しいものが出てくる。しかし、1 カ月であれば、始まりの部分と中ほどの部分と、2 班の枠に分けて教育を喚起することも可能だと思うので、むしろ月間のような形の方が現実的ではないかという気がする。

(議長)

週間か月間かという問題。全国の例でも月間という県がある。どちらが多いか。

(事務局)

どちらかという週間の方が多数派である。25 県が制定しているが、1 カ月という期間を設定しているのは、6 県である。

(議長)

全国的には週間が多くて月間が少ない。しかし、月間もあるというのが現状で、別に全国の多数に従う必要は全くないので、高知県の実情に合わせると良い。今出されたような事情も学校ごとにあるので、その点をどうするのか。一つは週間にした方がそれから外れた企画があったとしてもインパクトがある。この期間に全体が動いている面と、1 カ月にわたると薄まってしまう面でプラスマイナスがある。その点をどう考えるかで変わってくると思うが、どうだろうか。学校現場としては広い方がいいという意見もあるが。

(委員)

無理をしないといけない学校が出てくるのではないかと思う。「拘束するつもりはない」と思っている、必ずそこに縛られる学校が出てくると思う。

(委員)

月間にすると、マスコミ等で報道されるのは、多分 11 月 1 日に集中する。

(委員)

そういうことが起こるので、今までいつも花火のように、最初の方がポンと上がって、後の方はスーッと全部消える形になっている。「もっと長く捉えてやっていきませんか」というキャッチフレーズを、県の方から出してもらう方がありがたいかなと思う。もちろんこれはマスコミの方にも理解していただきたいことである。

(委員)

月間については賛成だが、インパクトの点から考えると期間が長い。週間の方が集中する分、県民にはアピールできると思う。ただ、参観日や今の学校行事をそのまま「学びの日」の関連行事にすることは少し趣旨とは異なるので、それはそれでまた考えていく必要があるし、新たなものが出てくる可能性もある。

最初の 1 週間という期間だけで捉えると、そこから外れるケースも結構あると思うので、そういう意味では「1 カ月の期間がいいと思う。

(委員)

仮に自分が学校で取り組む場合、例えば行事のポスターやのぼり等をつくると思うが、その時に「学び月間集会」と書き加える。市町村や県でも、「学びの日」をアピールしたチラシをつくっていくと思う。そういう面では、月間の方が効果があるのではないか。一長一短はもちろんあるが、このような対応を考えると月間の方がやりやすいという感じはある。

(委員)

いろいろ考え方があってと思うが、原点へ返ると「土佐学びの日」をなぜつくるのか、なぜ制定するのかに戻ってくると思う。重点的に実施する期間を考えていくことも必要と思う。現実的に趣旨を徹底し、理解を深める上で、重点化をどう図っていくのかということで、週間が良いか、月間が良いかになる。重点的にといえば、焦点化を図る努力を皆でしていかなければならないので、私はどちらかというと週間の方がいいという感じがする。ただ、事業が実施できないなど、結果的に弊害が出てくるかもしれない。

(議長)

様々な意見を伺った上で提案だが、「学びの週間」ということにすると、実際には休日が入ったりして、実質的なウィークデーは大変幅の狭いものになってしまう。だがやはり、インパクトは短い方が大きいので、全体としては週間にして、学校現場については11月全体を許容し、月間的な取組を「学びの週間」の一環として捉えることをきちんと示すのはどうか。つまり、7日以降のことについては、一切教育の日とは関係ない取組とするのではなく、11月一杯は、そうした位置付けで学校で取り組んでもらってもいいのではないか。全部を月間に広げてしまうと、学校だけではない所もばらばらになってしまい、集中して取り組む意識が薄れてしまう面があるので、週間にして、実際は幅をもたせるということ。

秋の芸術祭等があるが、これは要するに冠でそれぞれが独立した事業だが、「芸術祭参加作品」と指定されている。これと同様に、「学びの週間」一環事業ということ、チラシや看板のタイトルの上に必ず書いていただくと、「あ、そうそう、11月というのは全体としてそうなんだ」、「週間なんですよ、1日その日なのですよ」ということが浸透していくのではないかと思うが、どうだろうか。特に、反対がなければそうさせていただきたい。

それでは、4番目の制定方法だが、資料にあるように、推進会議において「志の国土佐学びの日」宣言案を起草することになっている。事務局から、現時点での宣言案が出されている。その後、この宣言に全国生涯学習フォーラム高知大会実行委員会の委員の方々の賛同を得て、高知大会閉会式において宣言を行う段取りの提案だが、これについてご意見を承りたい。

制定というからには、どこが制定したのかが問題になるかもしれないが、生涯学習フォーラム高知大会の最終日の閉会式で宣言をしたことで、最終的な確認をされたとして良いだろうと思っている。今後もこの推進会議の意見を受けて、事務局の方で、大会までの間にいろいろと段取りをしてもらい、県民の合意に繋がっていただければと思う。具体的な取組について特に意見がなければ、宣言案について意見をいただきたい。

(委員)

「とき」は平仮名か。

(議長)

「志の国」と漢字がくると、平仮名の方が収まりが良い感じがする。漢字が重なるので、「土佐」は平仮名にしたらどうかなと思っているがどうか。

宣言案については、これもなかなか難しいので、今日確定というわけにはいかない。後日、「こういう文言を入れて欲しい」、「ここの部分はこういう表現にしたい」など意見があれば、事務局の方にファックス、メールで出していただき、事務局で再整理をして、持ち回りで皆の承認を得て、最終案にすることで進めたいと思うがどうか。今意見がある方は、意見を出していただけたらと思う。

(委員)

案を読んで気になるところが随分ある。まず、夢と希望を持てるような、気持ちが高揚していく文章を書いていきたい。

県外の例は、すごくまじめに書いているが、見ることによって高揚していく文章がいい。

それと箇条書きの部分。箇条書きとして入れるのであれば、相当中身を吟味する必要があるのでは。箇条書きの内容がばらばらである。ここに取組を載せるのか、それとも「こんなことをつくろう」という想いを載せるのか。その辺りが非常に分かりにくいので、ある程度統一して考えないと、また、ばらばらなものが出てくる感じがする。

(議長)

一番簡単なのは、「11月1日をとき学びの日と宣言します」という形。しかし、それでは県民にメッセージが伝わらない。つまり、何のために、どんなことを目指してこの日を設定するのか。そのエキスの部分を書いたらどうかというのが私の意見。

教育振興基本計画をつくる時に、「教育の理念」について議論した。土佐の教育

改革から引き継いでいるものと、新たに付け加えた「自ら学ぶ」という案など。そうした「理念」を書くのが良いのか、それとも、「学校教育だけでなく、高知県の教育文化風土というものを一層高めていくために、この日を制定する」ということに重点を置くのか、いろいろな重点の置き方があると思うが、その事に関して皆の意見をいただきたいと思う。

(委員)

幼児期から十分な愛情を注ぎ…とあるが、これを入れるのか。あまりにも当たり前のことを、入れる必要があるのか。「家庭の教育力を高める」、「家族の絆」といった内容は入れるとおかしいのではないか。

(議長)

教育振興基本計画をつくる時に、教育委員会、学校、地域、家庭の役割について明示したことは、一つの特徴だったと思う。その点をおそらく強調したかったのではと思うが、この文章で良いかどうかは別である。

案のように書くのが良いのか、それとも、もう少し一般的に夢と希望が持てるような文章にするのが良いのか。教育という議題になると、何となく皆がトーンダウンしてしまうような、あるいは尻を叩くような感じになってしまうので、そうではなく、前へ進んでいけるような形が良い。

今、「こんな文章を入れて欲しい」、「こんな文言がいいのでは」といった意見があれば出していただきたい。

(委員)

案では「取り組んでいきます」とあり、行政主体で書いている。どういう形で投げ返していくのか考える必要がある。

(議長)

県の生涯学習フォーラム全体、高知大会の場で宣言するのであれば、「我々、県民は…」というのが主体、主語だろう。だから、行政が訴えるのではなく、高知大会という名前で、県民が県民に対してメッセージを出すという趣旨だと思う。

(委員)

「取り組んでいきます」という言葉があると、市民と共有しようという宣言ではなくなるので、やはりこの1行は変える必要があると思う。

その後の箇条書きの部分をどのように持ってくるかが非常に大切で、頭を悩ますところだと思うが、やはり、教育のベースをこう考えるという宣言を行い、今

後、委員会が何かを行う場合には、宣言に沿って「こういうことに取り組みます」としていく形が良いと思う。

(議長)

「取り組んでいきます」という表現以外に、どういう文言があるか。

(委員)

例えば、「風土をつくりましょう」など、「〇〇をつくりましょう」という感じの呼びかけであれば、もっと皆で共有できるようになるかもしれない。

例えば、「学び続ける」という部分では、一人一人の夢の実現のために、「学び続ける強い意志を育む高知県の風土をつくります」といった感じで、風土づくり、人間性づくりなど、何かを「つくります」という形にするのはどうか。

(委員)

宣言文の中に、「学びの日」をつくった意味や意義なども入れるのか。

(議長)

その予定である。ここで議論をして提言を出すのが、それを教育委員会の方で持ち帰って、県民の各階層が学びについて集まる生涯学習フォーラムの実行委員会の方々に賛同をお願いして、宣言する形になる。したがって、何故この教育の日を制定するのかという説明も必要である。何をしたいのかということについても同様。

(委員)

だから、これこれ、このような風土をつくるために、「ここに、とき学びの日を宣言します、制定します」という形になる。

(委員)

あまりくどくど言わない方が、良いかもしれない。

(委員)

箇条書きの部分は、今後どういう形で実施するのかという部分に繋げないと、宣言の中に入れることにすごく無理が生じる気がする。

(委員)

「何とかしなければなりません」というよりは「何々します」という形が宣言

文としては良い。

<休憩>

・議題（２）「教育版 地域アクションプラン」について」

<事務局から資料２の説明を行う。>

<意見交換>

（委員）

４件のＡランク評価があるが、資料を見ると果たしてＡか。中には予定通り、予定以上の成果を上げている所もあるように思う。ただ、あくまでこの評価は、PDCAサイクルによるものだから、当初目標に対してどうなのかというところであり、目標が低いと達成率は高くなる。

例えば、図書館の利用者率でも、890人のところを100人上げて1,000人にするという目標は、それほど高くはない。それで結果が1,010人であった場合にＡをつける場合と、当初に２倍以上の目標値を掲げて、２倍には届かなかったけどそこそこの結果であったが、達成しませんでしたとする場合があるように、目標の設定の仕方、評価が違ってくることになる。そういう意味では、目標を適正な数字に収めることがまず大事。荒唐無稽な数値を掲げても意味がないし、すぐ達成できるような値でもいけない。

今回が初めての中間評価なので、評価にばらつきがあっても仕方がないが、こうした作業を通じて、あるいは県教委との往復を通じて、目標の設定の仕方やチェックの方法について習熟していくことも大事で、お互いに学んでいってほしいと思う。来年３月に事業が終わった後、「さあ、チェックするぞ」という場面で評価をする材料が何もない、やってはきたが、外見的评价だけで内容的な評価ができないということがある。

もう一つ、教育については数字で評価することが大変難しいと言われている。短期間では成果が出ないという意見もある。しかし、単年度の計画でやはりチェックを行い、こういう作業を通じて各地域の教育委員会、あるいは学校現場に伝えていってもらえたらありがたいと思う。ただ、取組のチェックばかりしていて実際の作業が進まないという意見もあった。そうならないように、きちんと半年に一度は振り返り、後の半年をどうするかということについて、それぞれのところでしっかり意思統一してやっていただけたらというのが希望である。是非、市町村教委の方々にそう伝えていただきたいと思う。

(委員)

各地教委の総事業費というものを比較してみると、これが各地教委の現実的な教育の事業だと思う。これを見ると、やはり、各地教委の教育に関する事業が非常に少ないと思う。その辺りが教育事業に充てる事業を組み立てていない高知県の地教委の弱さを感じる部分である。そして、今後、これらの事業費が地域アクションプランの2分の1補助というところに集中してくることが予想される。そうした時に、全て県として支援できない状況が生じて、相当絞り込むことになるだろうが、そこで3つの視点と10の基本方針に照らし合わせたものを重点化して、教育風土づくりを進めていく、そういうことを大事にしてもらいたいという気持ちがある。

(委員)

事業費が少ないということは、地教委自体が、教育に対する事業をあまり打ってないということ。予算を取ってこういうことをやりたいという案があっても、首長部局で切られている部分も随分あると思う。やはり、地教委の首長に対する発言力の弱さというのがあり、そういう部分も含めて、これから議論を広げていく必要があるだろう。

(委員)

高知県の教育という資料を見ると、小・中学校とも改善率が、全国1位になっているということで、大変素晴らしいことだと思い、私も普段、教育現場にいないのでいろいろ勉強させてもらった。PDCAのサイクルを徹底するという点で、学校現場で校長先生はPDCAのサイクルを回して取組を行っているのか、教えてほしい。

(委員)

すごく温度差がある。昔と比べて、現状やゴールラインイメージを持つ必要があるということについてはずいぶん根付いてきた。ただ現実として、それをどう動かしていくのか、これまで経験がないので、成功感覚がない先生がたくさんいることも事実。物事を考えるうえで、そういう感覚が定着したことについては、全員一致で手応えを感じている。

(議長)

最初この資料を見たとき、「これは学校現場の資料かな」と思った。学校現場は何をしているのか、全然分からない状況であり、すごく違和感を感じる。学校の中で校長先生は、市町村の教育委員会の人と連携を取ってやっているのか。

(委員)

本来は、そうでないといけない。例えば、地域アクションプランについて、現場の先生はほとんど分かっていないと思う。すごく違和感があるが、地教委、学校長としての想いの繋がりができていない。地教委としても、この地域アクションプランの目的や内容について、相当しっかり説明していかないと、結局、血が隅々まで巡っていかない形になるので、そこが今の大きな課題だと感じている。

(次長)

各小中学校においては、全国学力学習状況調査の結果を踏まえて、特に学力面での課題について、具体的にどこに課題があって、どのような対策で、どこまで改善をしていくかという、「学校改善プラン」をつくっている。西部、中部、東部教育事務所の指導主事が入って、プラン実施のフォローをするとともに、そのうちの50校については、小中学校課の学力改善チームが学力向上に関するPDCAサイクルを確立させる取組を進めている。教育全体で見ると各市町村間で取組に差が生じている面があるが、学力向上については、全市町村で取り組んでいただく形にしている。

・議題3 「平成22年度高知県教育委員会 施策に関する点検・評価」について

<事務局から資料3-1、3-2について説明を行う。>

<意見交換>

(特に意見なし)